

あ と が き

新元号令和がスタートし1年が経過しようとしている。早いものである。地球温暖化の影響がいわれているが、大変大きな自然災害が甚大な被害をもたらした1年でもあった。現在も大勢の方が避難所生活を強いられている。お気の毒なことである。1日も早く元の生活に戻れることを願ってやまない。

また四季のサイクルが狂ったのか、おかしなサクラが昨年から咲いている。「世の中は3日見ぬ間のサクラかな」と世の移り代わりの早さをいうが、国民感心のこのサクラはいつ頃散るのか。散り際はどうか。

他方、明るい元気の出るニュースもあった。昨年の10月22日には「陛下即位礼正殿の儀」が行われた。若々しい、新天皇が即位した。国民に寄り添った親近感のある象徴天皇として国をあげてお祝いをした。おめでたいことである。

しかしながら、思わぬところで新型コロナウイルス感染症の世界的流行となった。各種のイベントが中止となり、東京2020オリンピック・パラリンピックも延期されることになった。誠に残念なことである。健康被害だけでなく景気への影響も大きく、国民生活に大きな混乱が生じている。感染症の流行は今年に限ったことではないので、将来にわたった対策の強化が望まれる。

さて、わが国は少子高齢化、人口減少が急速に進行している。そのような状況下、出生数が2019年は約86万人となり、見通しより1年早いペースで90万人を下回ったことが大きく報道された。国立社会保障・人口問題研究所は、今後、総人口は急速に減少し、2053年には1億人を割ると予測している。

人口減少は、わが国経済の成長を鈍化させることになる。昨今、「健康経営」や「働き方改革」等が取沙汰されている。公益法人としてふさわしい、将来を見据えた継続的な成長を可能にするためにも、労働力人口減少の中、高齢者等の活用は法人運営上の重要な課題である。予防医学の専門機関である本会は昨年10月8日、理事長による「健康経営宣言」を発表した。同時に、「健康経営優良法人2021 ホワイト500」認定を目指している。

健康寿命の延伸は人々の願いである。役職員一丸となり東京都民の健康づくりの多様な要望に対応できるよう努力していく所存である。

最後に、この2020年版(平成30年度活動報告・通巻第49号)を発行するに当たり、東京都をはじめとする行政当局ならびに東京都医師会・東京産婦人科医会・東京小児科医会等、関係機関の先生方のご指導ご支援に感謝を申し上げます。

2020年3月

公益財団法人東京都予防医学協会
専務理事 小川 登